

## 巻頭言

## 産学協創の時代

藤 本 一 郎



電気工学創立100周年記念事業の一環として平成10年6月に創刊されたCueも、先生方、外皆様のたゆまぬご努力のおかげで、充実した内容の刊行が続けられ早くも3年が過ぎた。教室と産業界をつなぐ強力パイプとして大役を果たしてきている。

産業界に籍をおいた私として、産学協創に関して日頃感じていることの一端をご披露しご批判を頂ければと思う。

平成7年11月科学技術基本法が議員立法で、全会一致の賛成で可決成立した。わが国もキャッチアップの時代（異論のある方も多かろうが）からトップランナーの一員として世界に貢献するとともに、科学技術創造立国を目指すとの趣旨である。先端科学技術の開発による新産業の創出への大いなる期待に満ちており、事実またそれなしではわが国の持続的発展はあり得ないこと、その通りだと思われる。

産業界も過去は日の当たる産業、又は斜陽産業と、産業分野別に良し悪しが分かれていたが、現在では同一産業内でも会社ごとに業績に大差が生じる時代になった。急速に変化しつつある社会のニーズに合致した新規商品を、又新規事業をタイミングよく創造し続けられていけるかどうか「会社生き残りの条件」という厳しい時代である。勿論新規と言っても、ただ新しければといったものではなく、ターゲットが明確に設定されていて、その人たちに惚れ込んで貰えるものでなければならない。そう言ったものは現状の延長線上にはなく、価値観の異なった人々の努力の結集からとか、異分野間の領域の有機結合から生まれる事が多い。会社内で言えば2つ以上の事業部にまたがり、さらに当然の事ながら研究開発部門も巻き込むプロジェクトになる。この協同開発体制を如何にうまく一体化して機能させられるかが成功の鍵である（ $1 + 1 = 3$ にしたい）。

同一社内とは言え各部門には夫々異なった歴史、文化が存在し、社内であるが故に「言わなくても通じ合う筈」と言う先入感がかえって問題を難しくする。（他部門の人は外国人だと思って接するぐらいがよい。）

又1社で全ての技術をまかなうには限界があり、外部に助けていただく事になるが、そうなると文化の壁は更に高くなる。一方で科学技術基本法にも示されているように大学、国家研究機関と産業界との産学協創がわが国の将来に欠かせない大きな原動力となる。我々日本人は異文化の人達との共存で苦労した経験を殆ど持たず、その事自体ある意味では幸せであったと言えようが、免疫が出来てないのも間違いない。協創プロジェクトを組むにあたって、産業界の者にとって大学の人は異邦人であり逆もまた然りと言えよう。金太郎飴とは違う。協創の実をあげる成功の鍵は、先ず文化の違いの存在を認識し合い、お互いにその溝を如何に埋めあうか、又逆にその違いをプラスに転化するような努力をすることから始めるべきであろう。明確な目標の設定、アプローチの仕方、徹底した意見交換（場所と時間を準備）、幅広い情報共有の手段を持つ、などなどその為になす事は多い。出来うれば、同一場所で開発をしたいものである。

研究成果が大きな売上につながった（社会が価値を認めた。）場合には無上の喜びを感じるものであ

るが、それが次のステップへの大きなエネルギーになる。是非この喜びを経験してもらいたいものである。

産業界は新規事業のアイデアを懐にしてその種を必死になって探している。大学側も研究方向の模索の中で実用化を頭に描いて努力している。両者の出会いの場（Cueもそのひとつ）を多く設け、互いに積極的に利用していきたいもの。美味しいネタはまだまだ沢山有る。皆さん方も忙しい中ではありましようが、お互いに異文化との接触を深め合い良い果実をものにしようではありませんか。